

令和7年度
地域福祉推進のための
テーマ型意見交換会

《実施結果報告》

テーマ型意見交換会の趣旨

大田区地域福祉計画で掲げる基本目標の達成に向けて、毎年、その時々**課題テーマを設定**し、テーマに応じた関係者と、**現状の課題整理**と、その**解決に向けたアイデア出し**を行います。

その結果を当推進会議において、いまずぐ実践出来ることや、今後必要なことなどを整理し、施策への反映等も検討しながら、目標の達成に向けて推進していきます。

基本目標

ともに支えあい
地域力ではぐくむ
安心して暮らせるまち

① つながりを感じることができ
地域をめざします

② 誰もが地域に
参加できる共生の
まちづくりを進めます

③ 安心して生活できる
地域を支えます



新たな検討テーマ

地域福祉計画
推進会議

すぐできること

今後必要なこと

計画の推進へ

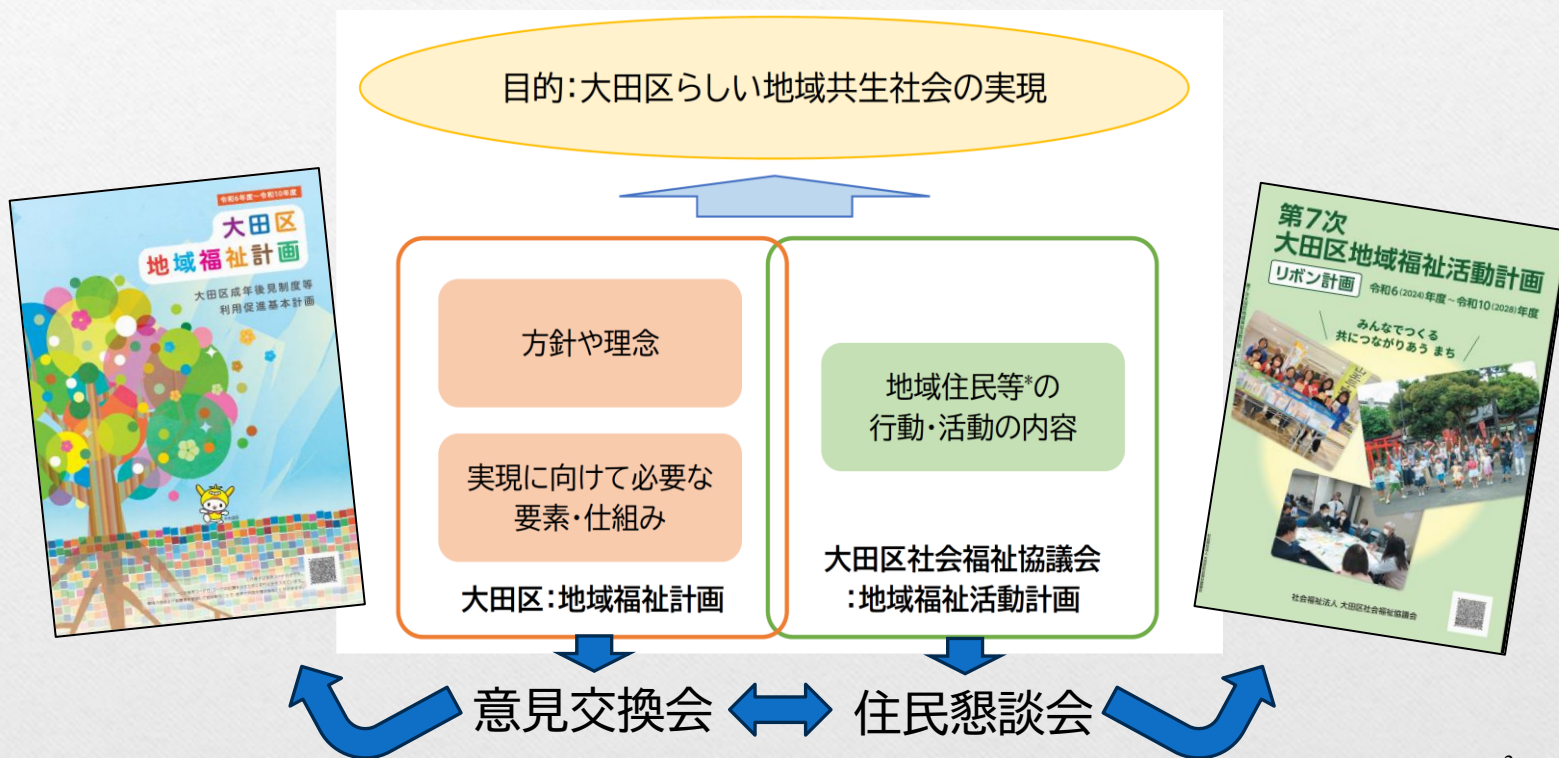
新たな検討テーマ



©大田区

区と社協で意見交換会・住民懇談会を実施

区は、**必要な施策の検討**をするため、**関係者との意見交換会**を実施し、
社協は、**日々の地域活動等に活かすための住民懇談会**を実施することで、
地域福祉の推進に必要なご意見・アイデア出しを行います。
また、こうした取り組みを通して、**関係者への計画の理解・啓発**を行っていきます。



テーマ①

「支援拒否する方への支援のあり方」

- 複合的な課題を抱える方の中には、支援の手を差し伸べても、「大丈夫」、「必要ない」と支援を拒むことがよくあり、支援者側は必要だと思っても、困りごとの切り口からは、サービスにつながらないということがよくある。
- 本当に支援を拒否しているのか、それとも本人の本当の意思は何なのか、課題の重度化を防ぐためにも、支援拒否などうまく支援につながらない方への糸口を探る意見交換・アイデア出しを行った。

ゲストティーチャー



日本社会事業大学
教授 菱沼 幹男 氏

「支援拒否する方への支援のあり方」

参加者

地域包括支援センター、JOBOTA、
障がい者総合サポートセンター、
大田区社会福祉協議会(地域福祉コーディネーター)、
子ども家庭支援センター、
大田区介護支援専門員連絡会

から計18名(4グループ)

「支援拒否する方への支援のあり方」 支援拒否や支援につながらない人の特徴

こだわりタイプ

- ✓ 独自の持論など、マイルールがある
- ✓ 今までの生き方やスタイルなどの固定されたものがある
- ✓ 自分のテリトリーに入ってほしくない
- ✓ ケアのされ方にこだわりがある

課題認識がないタイプ

- ✓ 「まだなんとかなる」と問題の先延ばしをする
- ✓ 自分なりにギリギリでコントロールできている(と思っている)
- ✓ 生活上の課題に対する意識(見通しが無い)が乏しい
- ✓ 病識がなく、医療にかかってもメリットがないと思っている

あきらめタイプ

- ✓ 困るのに慣れて麻痺している
- ✓ 成功体験が少ない
- ✓ 今さら生活を変えられないと思い込んでいる。
- ✓ 話してもしょうがないと思っている

トラウマタイプ

- ✓ 過去に受けた支援でのネガティブなイメージが払拭できない
- ✓ 行政嫌い(過去に嫌な思いをしたことがある)
- ✓ 支援者に対してうんざりしている(「あんたは何をしてくれるの?」)

「支援拒否する方への支援のあり方」 支援拒否や支援につながらない人の特徴

理解できないタイプ

- ✓ 理解力が乏しく、見通しが立てづらい
- ✓ 現状でしか判断できない、実際に体験しないとわからない
- ✓ 様々な手続きが苦手(優先順位がわからない)
- ✓ 何をどう相談したら良いかわからない
- ✓ 背景に知的障がいや精神疾患、認知機能の低下がある。

受援力が低いタイプ

- ✓ 自立心が高い、自己解決してしまう
- ✓ 元支援者側だった
- ✓ 自分や家族の恥を見せたくない

コミュニケーションが苦手タイプ

- ✓ 仕事をずっとしてきて人付き合いがなかった(特に男性高齢者に多い)
- ✓ 話のポイントがズレてしまう
- ✓ そもそも人嫌い、人と関わるのが苦手

ミスマッチタイプ

- ✓ 本人のしてほしいことと支援者の必要なことが合わない
- ✓ 期待が大きく、うまくいかないと拒否になる

本人以外が拒否タイプ

- ✓ 本人が受け入れていても家族が拒否する
- ✓ 自分よりも家族の思いを尊重してしまう

「支援拒否する方への支援のあり方」 対応策

本人との関係性をつくる

- ✓ 雑談や支援とは関係ない話を長くできる時間が
必要(その人の価値観を知る)
- ✓ 本人との関わりで、共通の話題を探る
(例えば、
 - ・本人が一番輝いていた時の話を聞く
 - ・かろうじて開けてくれたドアの隙間から見
えた絵について話をしたらそれがきっかけと
なって支援につながった
- ✓ 本人や家族の考え方を知る、他愛のない話を聞
く、話を理解できるように支援者自身も様々な経
験を積むなど
- ✓ 関係づくりの支援には時間がかかるため、その他
の事務などの効率化も必要(ICT化の活用、会
話の自動記録など)

つながり続ける(チャンネルを保つ)

- ✓ キーパーソンを見つけて一緒に働きかけて、小さな
窓口を広げていく
- ✓ 他分野との連携が大切(医療や法律家、医療連携
相談会など)
- ✓ 連携によるチームアプローチのためのハブとなる
方が必要(それは行政が良い)
- ✓ 訪問のきっかけをつくって、細く長くかかわる
- ✓ 支援者側の姿勢として、あきらめないことが大切
(拒否があるとジレンマや葛藤で心が折れがち)

「支援拒否する方への支援のあり方」 対応策

本人の強みを活かす

- ✓ 本人を「ケアされる人」ではなく「ケアをする主体」にする(例:畑の水やりなど)
- ✓ 支援者があえて「力を貸して助けてください！」と明るく訪問し、役割を持ってもらうこともある
- ✓ 一番楽しかったこと、うれしかったことを探り、再チャレンジへと働きかける
- ✓ 興味・好きなことなどをヒアリングして出番をつくる
- ✓ つながりがない人がいける居場所づくりが必要
 - ・タバコが吸える
 - ・お酒が飲める
 - ・何もしなくてもよい など

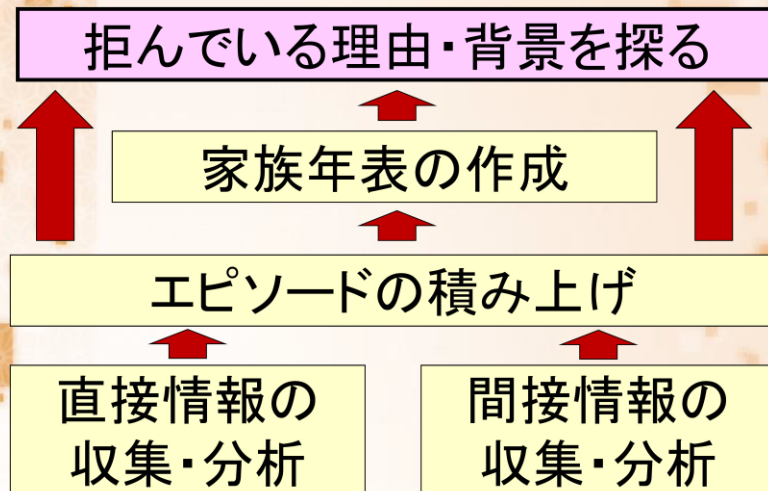
本人への説明方法を工夫する

- ✓ 電話やメールなど、本人が話せるためのツールを工夫する
- ✓ 小さな一歩のための具体的な行動例を示す
- ✓ メリットの提示、役立つことを提供し、距離を縮める

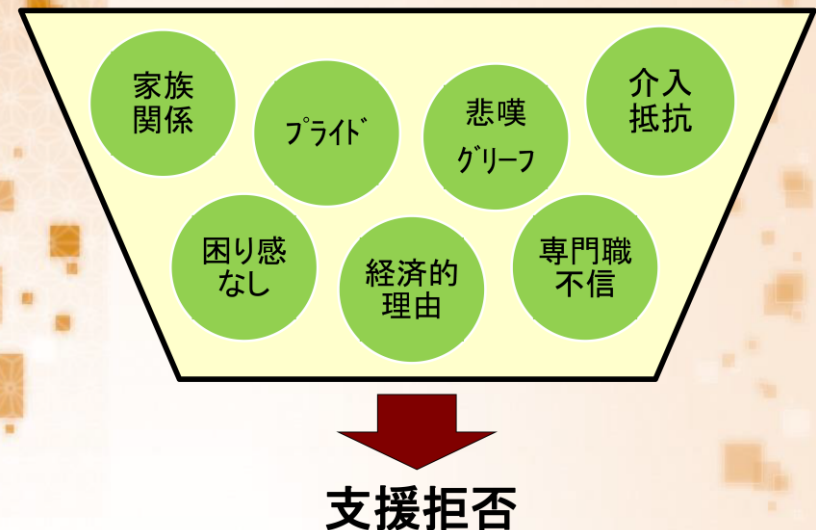
《ゲストティーチャーからのアドバイス》
支持的療法：相手を変えるのではなく、相手の語りに耳を傾けながら本人が本来もつ能力を高めることを目的に一緒にこれからを考える方法が大事！

菱沼教授の講義資料から抜粋

なぜ支援を拒んでいるのだろうか



支援を拒む理由は、さまざま



「支援拒否する方への支援のあり方」 まとめ

- ◆ 結果的に支援拒否となってしまう方の背景には、単なる拒否ではなく、さまざまな要因があって、人によってその理由が異なるため、**個別性でとらえる必要がある**。
- ◆ 拒否となる背景を探るには、**本人の困りごとだけではなく、本人の興味・関心から関係性を構築**することが必要となる。
- ◆ 関係づくりには、介入のタイミングやきっかけも大事で、それには**長い時間を要することがある**。
- ◆ **本人との関係づくりも必要な支援行為**であるが、支援者によっては、報酬にならない支援はシャドールワークになりかねない。
- ◆ そのため、一人でこの関係づくりを行うのは負担が大きく、**チームでアプローチ**することが必要で、そのための**ハブとなる調整役(行政側)が必要**である。
- ◆ 関係づくりへの支援に時間を割くには、**ICT化などによる事務効率・削減が必要**である。

「支援拒否する方への支援のあり方」 参加者の感想



✓ 当事者が支援を拒んでも、**細く長く関わり続けることが重要**であることを再認識しました。

✓ 色々な支援機関の方と話し合いが出来て、同じ課題でも違った視点の意見を聞くことが出来ました。**支援される側が支援する側になるようにしていくという発想は参考になりました。**



✓ 今回、**様々な話をざっくばらんに話すことができ、今後の支援の幅の広がりにつなげたい**と思いました。また受援力という言葉も印象的で、今後の対応の際の一助となりそう。

✓ 拒否が強く、どうしても支援につながらないケースでは、支援者側が自身の力量不足が原因では…と感じることがあるため、菱沼先生の講義のとおり、**支援者の支援も必要**であると感じました。



テーマ②

「身近な地域の居場所から必要な支援につなぐためには」

- 昨年度テーマの「地域の居場所について」の意見交換を経て、居場所がもつ役割・効果として、「①第3の相談の入口機能」と「②地域づくりの拠点機能」があるのではないかと整理しました。このことをふまえて、今年度は、「①第3の相談の入口機能」をさらに深堀して、身近な居場所等の相談の入口から必要な相談支援につなぐには、どのようなしくみや連携が必要か、アイデア出しを行いました。

ゲストティーチャー



東京都立大学
名誉教授 小林良二氏

参加者

立ち寄り型、提供型、サークル型などの居場所団体と、大田区社会福祉協議会の地域福祉コーディネーターや地域包括支援センターの見守りささえあいコーディネーターなど

から計27名(4グループ)

昨年度の意見交換会テーマ「地域の居場所について」 居場所がもつ役割・効果とは

公的な相談窓口、
民間の相談窓口
にはない
地域ならではの

第3の相談の入口機能

昨年度の意見交換会で出た意見

- ✓ 孤立化の防止になる。
- ✓ 安心感が高まり、不安が低減する。
- ✓ 相談できる人が増える。
- ✓ 専門機関につながるきっかけになる。
- ✓ 自己肯定感の向上につながる。
- ✓ 生きがい・活力を得ることができる
- ✓ 生活習慣のリズムが生まれる。
- ✓ 社会的なマナーが身に着く。
- ✓ 自己と他者の違いを学ぶ。

地域づくりの拠点機能

昨年度の意見交換会で出た意見

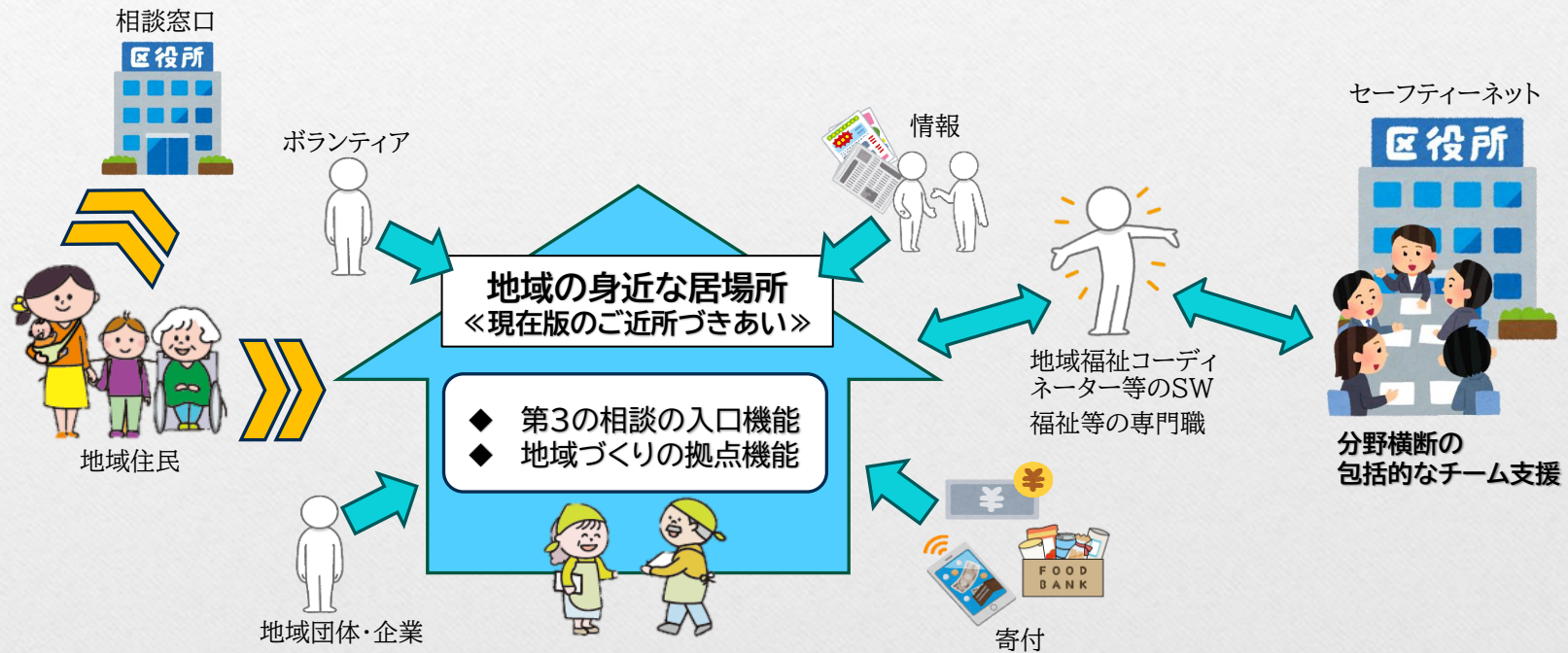
- ✓ 人・もの・情報が集まる。
- ✓ 多世代の関わりが生まれる。
- ✓ 見守りとしての機能、地域で支えあう関係づくりができる。
- ✓ 地域で顔見知りが増えて、防犯につながる。
- ✓ いま活動をしていることで、ゆくゆくは自分の老後の居場所にもなる。
- ✓ 新しい自分を発見できて、やりがい・生きがいにつながる。

ご近所づきあいのような助けあいのコミュニティーの機能が
居場所にはあるのかもしれない……

「現代版のご近所づきあいのような顔の見える居場所」

現代において、プライバシーや防犯の観点からご近所づきあいのような助け合いが弱まる中、プライベートな自宅とは別に、コミュニケーションがとれる身近な居場所のような公共空間があることで、そこに**人・モノ・情報等が集まり、地域づくりの拠点**となっていく。

そして、そうした場において、顔の見える関係だからこそ、緩いネットワークの中で、行政の相談窓口機能では、なかなか掴めない方々にとって、**第3の相談の入口**となって、**適切な福祉サービス等につながる可能性があり**、つながりのしくみがあれば**誰一人取り残さない支援体制**を築いていくことができる。



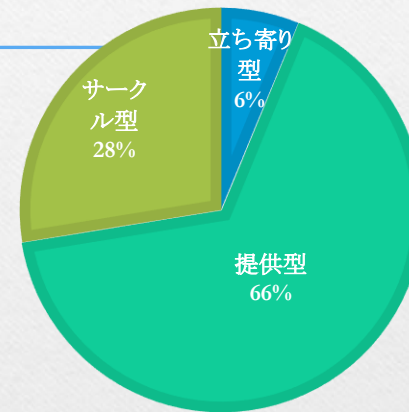
指標達成のためのウォッチング項目

「現状の居場所分析」

大田区社会福祉協議会で、子ども食堂連絡会やつどいの場活動支援助成などで把握している地域の居場所に関する団体263団体について分析

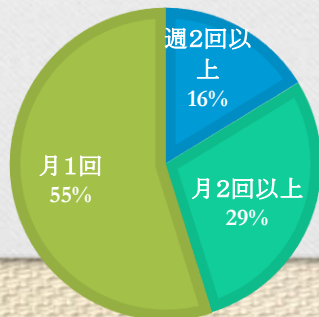
★目的別分類

立ち寄り型	イベント等がなくても、ふらっと立ち寄れる居場所	13	大森	4
			調布	1
			蒲田	7
			糀羽	1
提供型	食提供や学習支援などを目的に参加者が集まり、交流の機会があることで、居場所となる場	148	大森	48
			調布	27
			蒲田	41
			糀羽	24
			広域	8
サークル型	支援を目的とせずに、企画したイベントや取組を目的に参加者が集まり、交流の機会があることで、結果的に居場所となる場 ※生涯学習団体データを含んでいないため実態はもっとも多い分類	62	大森	13
			調布	22
			蒲田	16
			糀羽	9
			広域	2



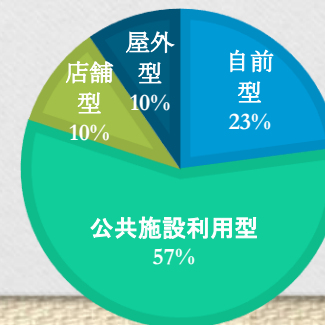
★実施頻度分類

週2回以上	32
月2回以上	57
月1回	108



★実施場所分類

自前型	55
公共施設等利用型	137
店舗型	25
屋外型	23



「身近な地域の居場所から必要な 支援につなぐためには」 居場所に来る人の特徴や気になる人

立ち寄り型・サークル型

- ✓当初は話しているだけの集まりだったが、徐々に、趣味を教え合ったりする活動になった。
- ✓認知症などで活動に來れなくなると、介護保険のデイサービスなどに通われるようになる。デイサービスがない日は家族が送って來る人もいる。
- ✓高齢者で耳が聞こえづらい方などは結構來る。
- ✓最近の活動で「認知症の症状かな？」などと気になる方がいた場合は、仲間同士で、「最近少し変じゃない？」「今日は送っていく？」などと話している。
- ✓仲間を作りたいと思って参加される方が多い。
- ✓介護制度につながっていない人もいて、コミュニティの中で相談し合っ解決しているときもある。



「身近な地域の居場所から必要な 支援につなぐためには」 居場所に来る人の特徴や気になる人

提供型（こども食堂や学習支援など）

- ✓こどもはもちろん、高齢者で一人暮らしをしている人、知的障害者の8050問題に近い事例もある。
- ✓高齢者の一人暮らしでは、身体的障害や精神障害があると災害時に避難できない可能性があるため、心配している。
- ✓「いつも来ている人」がいて、これが支援になっているのかもと思うことがある。
- ✓こども食堂では写真拒否する人もいて、様々な事情のある方の配慮が難しい。
- ✓母子家庭も増えていてDVの人もいるが、行政との関わりはなく、行政や社協等とつながることができればと思う方がいる。
- ✓緊急時(家庭内の喧嘩・家出など)に連絡できないことがある。
- ✓不登校の方や支援級に通っている方が来る。一方で、支援者とはつながっているが、インフォーマルな居場所などにはつながっていない方もいる。

「身近な地域の居場所から必要な 支援につなぐためには」 必要な支援につなぐためのアイデア

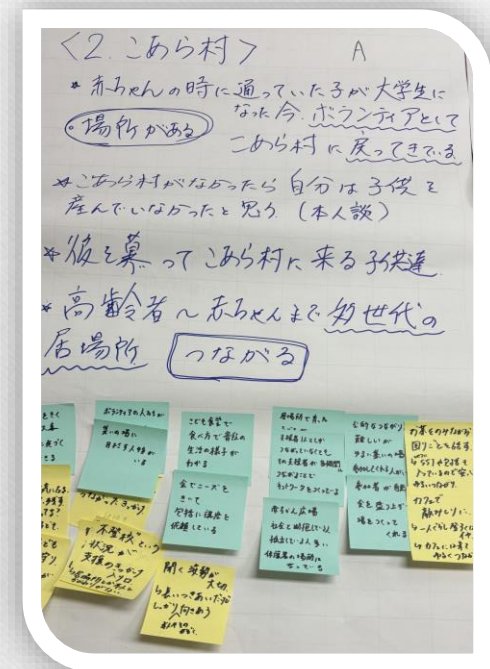
身近な地域の居場所となるための工夫

- ✓顔の見える関係づくりを基盤とすることが大事で、その方法として、挨拶が自然と交わせる空間づくりが必要
 - ⇒毎日続けることで、何か困ったときの相談相手として顔が思い浮かぶかもしれない
 - 無視されていないと思えて、人の目も増えていき、悪いことや自殺予防にもなるのではないか。
- ✓世代を超えたつながりの継続性を重視する
 - ⇒20年以上続く子育てを支援する居場所では、赤ちゃんのころから利用していた大学生がコロナ禍でこどもの居場所活動を主導した事例あり
- ✓「災害時対応を意識した平時からのつながり」を構築している
- ✓ 専門家とは違うピアサポート(同じような立場や経験を持つ人同士が互いに支え合う活動)の活用も必要

「身近な地域の居場所から必要な 支援につなぐためには」 必要な支援につなぐためのアイデア

必要な支援につながるための工夫

- ✓ デイサービス施設を間借りした運営をしており、直接的な支援連携が可能な立地条件を活用している
- ✓ スマホ講座等の実用的プログラムの提供や高齢者のデジタルデバイス解消の支援を行っている
- ✓ 団体同士のネットワークがあると安心して活動できる。
- ✓ 認知機能が低下した方への社協職員と相談同行支援
- ✓ 不登校のこどもの母親からの相談を受け、児童相談所への情報共有を実施。ただし、日頃の業務の多忙さから関係機関との接点創出が困難。
- ✓ 緊急時の対応を団体・行政間で整備しておく必要がある。
- ✓ 居場所の運営者が困ったときに相談できる窓口があると良い。

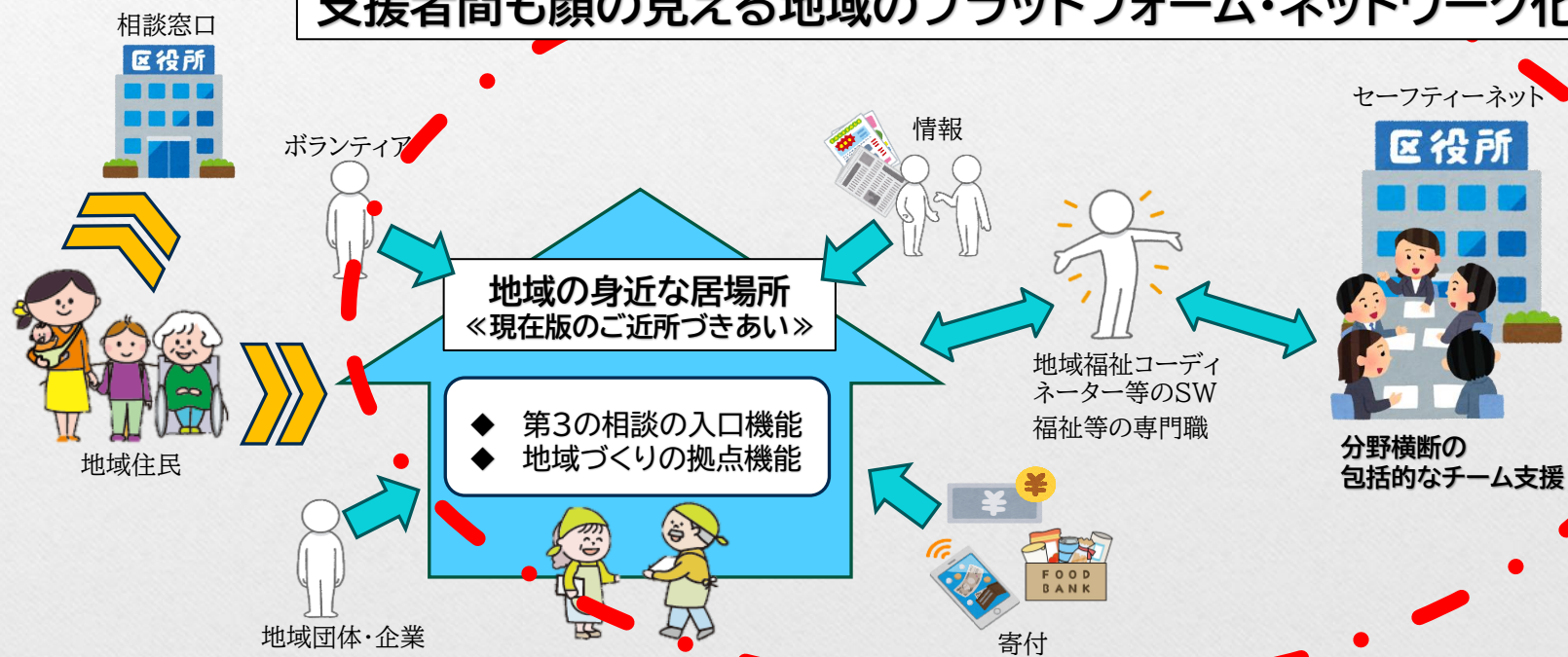


「身近な地域の居場所から必要な支援につなぐためには」 まとめ

- ◆ 現代におけるご近所づきあい・コミュニティのあり方として、自宅以外の居場所の整備はニーズと合っていると考えられる。
- ◆ 居場所に必ずしも困りごとを抱えた方が来るわけではないが、居場所によって孤独・孤立にならずに、問題の発生を予防できている一面もあるのではないかとと思われる。
- ◆ 居場所を通して、顔(声)が見える関係性があることで、普段から困りごとや心配ごとを仲間うちで相談し合ったり、助け合ったりすることがおきており、それが**早期把握・早期支援につながる**。
- ◆ 居場所などの活動と支援機関がつながるために、**各地域(小地域単位でも可)でプラットフォームなどの話し合いのネットワーク化**ができていくことで、必要な支援につながる連携が図れるようになる。
※連携には、支援者同士も顔の見える関係づくりが必要

「身近な地域の居場所から必要な 支援につなぐためには」


支援者間も顔の見える地域のプラットフォーム・ネットワーク化の推進




「身近な地域の居場所から必要な支援につなぐためには」 参加者の感想




✓ 地域を良くしようと願い頑張っている方が多くいるということを知り心強く思いました。



✓ 大それたことでなく普段からできる声かけを地道に心がけ続けていくことが大切であると感じた。声かけ相手の反応がなくても、何かのときに「そういえばあんな人がいたな」「こんな人に声かけられたな」と思い返してもらえる機会があることに期待して日々実践していくことができればと思う。



✓ 「現代版のご近所づきあいのような顔が見える居場所」の考え方に共感した。ご近所付き合いは少し窮屈に感じるが、コミュニケーションは大事だと思う人達、特に活動のコンセプトに共感して集まる共感型の若い世代とは相性がいい考え方だと思う。



✓ 居場所を運営している皆様には様々な課題があることを改めて知りました。地域の相談機関が輪番で参加するなどの支援体制構築も必要だと感じました。管轄地域の居場所と連携していきたいです。